

福祉車両体験



認知症に関わるCさんへの試み

デイケア利用のCさんは、初回が平成22年の5月より利用されていまして、7人兄弟の末っ子として生まれ37年間大工の仕事をされました。52歳の時に倒れ、平成8年脳梗塞、21年痙攣重症、嚥下性肺炎、緑内障の疑い、又短期記憶に問題ありとされ、当時より看護婦さんの名前等を覚えられないといった症状が見られました。現病では症候性てんかん、高血圧症があります。初回利用時より時々来所する直前になると拒否が見られました。来所されてから

は徐々に笑顔をとり戻され、入浴、創作活動に参加されています。平成22年の12月頃から来所拒否の反応がありました。時折御自分でベットの車イスのアームレスト等にしがみつき、移乗を阻止しようとの行動が見られるようになりました。

朝グッドモーニングの掛け声を自ら掛け、又掛けられると返事をされ、笑顔になります。目の調子が悪く、目がまぶしいと話をされます。しかし10分、時には1時間もすると落ち着きを取り戻され、平常に戻られる様子が見られます。入浴を好まれ、柳田温泉に行く誘えばうなずき、来所される事が最近まで多くありました。現状ではなかなか興奮してしまいついてはいる場合があり、意志の疎通がなかなかできず、聞き入れられません。しかし目は細めにしておいて回りの様子を伺っているようにも思えます。強引な発言、又意志に沿わない介助に対しては全力で反発し、"もう少し待て"との発言も見られます。

ます。痰がらみが平成24年8月頃よりあり、苦しい咳をされる事もあります。車イスへの移乗、座り直しは本人の意志がなければ出来ないといった状況で推移しています。

色々な観点から観察し、声掛けを行っていますが、未だ確定的な方法は見つからず、模索中です。今までの観察とスムーズに承所頂ける声掛けが表面的な観察に終わっているのではないかと反省があります。感覚的、表面的観察から、客観的な観察、パーソンセンタードケアを念頭に取り入れることにより、介護者の立場を長年の家族関係よりも寮母、寮父的な立場からの観察で、幼少時の父親や母親の立場に置き換えて対処することが必要と思われます。愛情をもって叱る時には叱り、賞める時には賞めるといったごく簡単ではあるが、認知症の判断中枢の変化(新皮質より旧皮質)を考えると最も適しているのではないかと考えられます。

今後の取り組みとしてそのような観点、立場からスムーズな来所が出来るように促して行きたいと思えます。

デイケア室 瀧口

敬老文化祭

毎年10月に行われる敬老文化祭。今年は商店街で昔スーパードレスとして使っていた店舗を借りて行いました。デイケアでは、活動写真を中心に展示しました。はぐくみの里での写真や、島忠散歩、屋外歩行の様子など何百枚とある写真の中から利用者さんと一緒に選び作品として展示させていたできました。手指のリハビリとして今年はお月見の貼り絵を皆で作りました。折り紙をちぎる作業では、個性が出ていて小さく細かくちぎる方もいました。中にはハサミを使いたいと言われ方もいました。貼り始めは大きな紺色の紙に丸く黄色の月を作っていました。皆さんどんな月ができるのか話をしながら

デイケア室 露木

ら作っていました。作品が完成すると、思っていたより綺麗に出来ていた事に感動されていました。当日、文化祭に来て下さった利用者さんは「良い作品が出来たね」と満足されていました。

デイケア室作品の貼り絵



介護体験を聞く会

ホームページ <http://www.yanagida-kaigo.co.jp/>

会報第153号
平成26年11月29日発行
発行所 (有) 明寿会
住所 川崎区中島1-13-3
電話 044-233-0061
*定例会は最終土曜日です。
(今年12月は20日)

今年の敬老文化祭は川崎駅から川崎大師まで徒歩15分の長い歴史をもつ旭町商店街で開催された。200人をこえる市民で賑わいました。参加者は原爆戦争展で昭和を生き抜いた歴史を振り返り、二度と戦争をやらせないことを誓った。医師の認知症講演では認知症の医学的解をまなび、認知症介護の方法を学んだ。(題字の下のホームページで講演の様子を見ることが出来ます。)

「敬老文化祭報告」

第12回敬老文化祭が10月25日(土)、26日(日)に開催されました。今年はいつもと場所を変えて旭町商店街にある旧旭勇ストアさんをお借りして行いました。会場は広くゆつたりと見ることができたのではないかと思います。今年の文化祭のテーマは「昭和の時代を生き抜いた人々の歴史展」ということになり、お年寄りの体験を

忘れない、若い世代に歴史の大切さを伝えたいという思いからこのタイトルに決まりました。今回はじっくりと見ていただくように会場のおよそ半分を原爆と戦争展として第二次世界大戦の写真や原爆の写真、川崎の空襲の写真などを展示して、残りの半分は柳田診療所、柳田デイケア、柳田デイサービス、グループホーム旭町、柳田居宅介護支援事業所、給食調理室の各事業所で私たちが普段

行っている活動の写真や作品を展示しました。文化祭が開催された両日に天候にも恵まれ非常にたくさんの方々にお越しいただき、たくさんのお客様にも答えていただきました。やはり原爆と戦争展が印象に残ったという方が多く、そのなかからいくつか印象に残ったものを紹介させていただきます。

「原爆の写真はとても悲惨で目に焼き付き、つらい気持ちです。」(70代女性)
「両親が広島出身で恐ろしさを再認識させられました。」(60代女性)
「戦争と原爆のコーナーは本当にあったこととは思えない程怖かったです。」(40代女性)
「私たちが同じ気持ちで、目を背けたくなる写真が多いなかで実際に起こっ

た出来事と考えると本当に恐ろしく感じ、2度とこのような戦争を起こしてはならないと思えました。また戦争を実際に体験された年代の方々の感想もいただきました。



原爆写真に見入る見学者

「原爆と戦争展を見た時に人がたくさん死んだ写真があつてすごく怖いと思いました。」(10代女性)
「原爆と戦争展を見た時に人がたくさん死んだ写真があつてすごく怖いと思いました。」(10代女性)



メイコ先生の戦争体験講演

「学校で本を見たけれど、今日ほかの写真も見れて良かった。」(10代女性)

「沖縄戦のことなど学校で教わったことがあったのでそれについての資料もあって印象に残りました。」(10代女性)

「悲惨な姿でびっくりしたし、自決していたのも写真で見たらびっくりしました。」(10代女性)

「学校でも勉強しているため原爆と戦争展が印象に残った。」(10代男性)

最近の小学生や中学生はしっかりとしているなどという印象を受けましたが、このような子供たちにも

来てもらって戦争や原爆の事について伝えられたことは非常にうれしく思います。今回の文化祭を通じて少しでも戦争や原爆について考えるきっかけになれば幸いです。

それ以外にも私たちの普段の活動について感想をいただきました。

「デイケア、デイサービス等での行事について作品はともすればらしくともいきいきとされており印象に残りました。」(20代男性)

「デイに参加している人達が前向きに作業に取り組んでいる姿が表れていました。食事に於いてもお年寄りのために考えて作られているので皆様の努力を感じます。これから

体験に聞き入る見学者



「現代社会は、見たもの、見えたものに対応し、考えることよりも反射行動や判断行動をさせる社会である。子供の教育やテレビなどのメディアをつかった大人への対応も目先だけで共通している。考えさせない教育を脳医学的にみると、脳の後ろ側にある視覚や知覚などの脳細胞群を中心に使っていることになる。人間の

「認知症の脳医学的理解」

文化祭実行委員長
グループホーム旭町漆原

旭町商店街で文化祭を行い、地域の方々にも大変お世話になりました。私たちの活動も地域の方々を支えられて成り立っているものだと改めて感じさせられました。2日間本当にありがとうございました。

「認知症の脳医学的理解」

現代社会は、見たもの、見えたものに対応し、考えることよりも反射行動や判断行動をさせる社会である。子供の教育やテレビなどのメディアをつかった大人への対応も目先だけで共通している。考えさせない教育を脳医学的にみると、脳の後ろ側にある視覚や知覚などの脳細胞群を中心に使っていることになる。人間の

「認知症の脳医学的理解」

現代社会は、見たもの、見えたものに対応し、考えることよりも反射行動や判断行動をさせる社会である。子供の教育やテレビなどのメディアをつかった大人への対応も目先だけで共通している。考えさせない教育を脳医学的にみると、脳の後ろ側にある視覚や知覚などの脳細胞群を中心に使っていることになる。人間の

現代社会は、見たもの、見えたものに対応し、考えることよりも反射行動や判断行動をさせる社会である。子供の教育やテレビなどのメディアをつかった大人への対応も目先だけで共通している。考えさせない教育を脳医学的にみると、脳の後ろ側にある視覚や知覚などの脳細胞群を中心に使っていることになる。人間の

一年を振り返って

肌寒くなり師走も近づき、そろそろ今年一年の振り返りをするような時期になってまいりました。とはいえ、僕は7月にグループホーム旭町から柳田デイサービス室に異動になったので、どちらの部署にも在籍半年。事業所の一年を総括する立場でもありませんので、異動のことも含め、自分がこの一年感じたことなどを報告させていただきます。

7月まではほぼ4年間、グループホーム旭町に勤務しておりました。9名の利用者さんが共同生活を営むのを支える立場、いわば「要介護者のいる(疑似)家族」の中で息子や孫のような役割をつとめてきました。介護職が24時間そばにいて見守れるのが施設の利点ではありますが、利用者にとっての家(プライベートスペース)に、他人が踏み込んで印象を与えないよう、心許せる

家族として見てもらえようように馴染みの関係を作っていくことが必須です。それが仕事としてのやりがい・楽しみでもあり、実際に自分の家族を介護したことがなく、祖父母世代と同居したこともない僕にとっては、難しい問題でもありました。

7月にデイサービスに異動になり、のべ28人の利用者さんとそのご家族と接することになりました。その数だけ「要介護者のいる家族」を知ることができ、自分は「要介護職」になり、介護そのものを少し俯瞰的に、客観的に見られるようになりました。

気づいたこと、学んだことは多くあります。(文字数の都合で)ひとつだけ、何を伝えようか悩みましたが「高齢者の可能性」にしようと思いつきました。要介護状態であっても認知症があっても、できることは沢山あるんですよ、という、この新聞を読んでおられる方なら聞き飽きたであろう話です。ですが今一

度、考えていただきたい問題です。高齢者の能力を過小評価してしまい、過度な介助で能力を向上させる(取り戻す)機会を奪ってしまったったり、認知症だから、年寄りだからとあきらめてしまっている場面を、未だに多く見かけます。介護者が高齢者の能力を奪ってしまつては、結果的に介護者の負担増につながりますし、要介護者と明るく楽しく生活する可能性を自ら閉ざしてしまいます。

デイサービスに異動になり、家族だからこそ近すぎて気づけないこともあるのだと知りましたし、だからこそ利用者のデイサービスでの様子を家族に伝えることも介護職の重要な役割のひとつなのだ、実感しました。

家族にとつては「家で寝てばかり、起きれば認知症」な方も、デイではリハビリを頑張ったり、洗濯物をたたんで下さったり、その笑顔で周囲を和ませたりして下さいませ。些細なことかもしれないですが、その活躍ぶり

新しい新皮質がある。なんと云っても人間がホモサピエンスといわれ、考える人、賢い人、知恵のある人という所以は、脳の前頭葉といわれる部分をよく働かせたからであり、この部分が発達したのは、よく考える生活を続けたからであり、新皮質の成長を獲得し、この部分が発達したからこそ地上の生命体の頂点にたっているのである。

つまり、せっかく人類がつくりあげてきた、獲得した大脳の前頭野の部分が、現代社会はそれを使わず、反射的行動、その場限りの判

断行動に対応する後頭部細胞群だけを酷使する、それで満足させる社会になつていく。これでは人類の発達の歴史の停滞であり、後退であり、大脳の能力の持ち腐れである。私たちの介護の仕事を見ると、利用者さんを注

意深く観察することを要求される業界であるが、後頭部を中心に関心する仕事だけでは表面的観察が中心になってダメである。当然のことながら、ケア活動をやりながらせっかく観察したことや学んだことが印象にのこらない。翌日にいかされない。それは観察記録ノートを

みても写真的真実の記録に頼る。たとえばなぜ認知症のお年寄りが車イスから降りようとしたのか、またなぜ急に車イスから降りてくれたのか、変わったのがか理解が困難になる。しかし、認知症者の判断中枢が、新皮質から旧皮質へその座を移していることが明らかになり、それを考えた場合、介護者の立場は長年の家族関

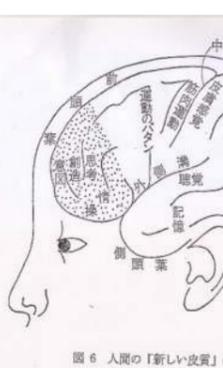


図6 人間の「新しい皮質」の分佈状況

を家族に伝えていくことで、高齢者の能力に気づいてもらうきっかけになればと思います。

文化祭でも行ったように、歴史を次世代に伝えていくことは高齢者にはできない役割です。だからこそ、次世代の将来も高齢者の将来も同じように可能性に満ちたものであると、利用者さんや家族に分かっていただければよい仕事ができると思います。

少し早いです、今年一年、ありがとうございました。

柳田デイサービス室
古谷

被爆写真をみる小学生

被爆写真をみる小学生

被爆写真をみる小学生



被爆写真をみる小学生